

日本学術振興会バンコク研究連絡センター

活動報告(2009年10月～12月)



■ 2nd JSPS International Forum: Roles of Universities in Community/Regional Development ■

2009年11月16(月)～17日(火) アマリ・リンカム・ホテル、チェンマイにおいて、当センター主催、National Research Council of Thailand、在チェンマイ日本国総領事館、チェンマイ大学後援、日メコン交流年事業認定により 2nd JSPS International Forum: Roles of Universities in Community/Regional Development が開催された。



本フォーラムは、日本とタイの大学等の研究・教育機関の地域 (Community/Regional) 貢献について、その取り組み事例と将来のあり方についての知見を共有するとともに、将来の取り組みについて議論することを目的とした。また、日タイの協力を通して、日タイの大学がそれぞれの強みを生かした国際化を助けることも意図している。

第2回の本フォーラムでは、第1回のフォーラムにおいて、とくに重点的に取り組むべき分野として挙げられた1) 産官学連携・地域イノベーション、2) 大学による地域へ支援、3) 地域資源の利用、



の3つの分野についてセッションを設け、それぞれ日・タイの研究者が共同座長として基調講演を行い、それに続くパネル・ディスカッションを主導して議論が行われた。

セッション1（地域イノベーション）では、基調講演として、日本の地域イノベーションの歴史を、養蚕、繊維産業の振興のために各県の試験研究機関が設置された時期から、最近の地域間のネットワークや、地域イノベーションの国際協力プログラムまでが紹介され、日本とタイを比較するとタイでは、日本のように地方の試験研究機関が無く、大学が地域振興に求められる役割がより大きいことが指摘された。一方、タイの研究者より、地域イノベーションにおける大学と企業のつながりを調べた研究例が紹介され、地域イノベーションにおいて、タイでは繊維・食品など農産物加工等の伝統産業において大学への技術支援、開発への要望が強いのに対し、先端技術産業では大学に対する期待は低いという実態が明らかにされた。その中で、例外的にハード・ディスク・ドライブの開発において産官学の密な連携により研究開発が成功した例も紹介された。



また、パネル・ディスカッションでは、チェンマイの商工会議所の主導による、産学連携ネットワークの活動も成功例として、他の産業や地域でも成功するための重要なヒントを示すものとして議論された。日本からは、JSTによる地域イノベーション・プログラムが紹介され、産官学連携のためのサテライトの設置とコーディネーターの任用はとくに参加者の関心を集めた。チェンマイ大学からの発表では、地域振興は大学の卒業生が地域にとどまることができ、大学自体にも重要であることが指摘された。

セッション2では地域への支援、とくに医療・保健分野での地域支援について議論が行われた。基調講演では、タイの痴ほう症患者の治療とケアについて、病院医師、看護師と Caregiver（介護士に相当する立場、この場合とくに法的根拠のある資格があるものではない）を中心とした、地域による治療・介護システムの構築への取り組みが紹介された。チェンマイ大学の取り組みでは、山岳民族等で定職に就くことが難しい人材が Caregiver としてトレーニングを受けており、教育や人材育成のプログラムとしても有効なものになっているが、今後、このトレーニングを資格・職として生かすことや、プログラム運営資金の確保が課題となっている。日本からは、香川大学がとりくむインターネットを使った医療支援システムが紹介され、遠隔地への医療（例えば、妊婦のモニタリング）に有効なほか、海外に住む日本人への医療支援や、日本で発症した熱帯病患者への熱帯地域の専門医による診断・治療へのアドバイスなど、国際

的なネットワークとして活用の有効性も紹介された。引き続いてのパネル・ディスカッションでは、その適用の意義や問題点について、日本総領事館職員およびチェンマイ在住日本人の連絡会からの提言も行われた。地域医療への取り組みとしては、**Community base medical education** という医学部学生が地域コミュニティーに入り、医療・保健にかかわる様々な活動に参加して、地域医療に必要な知識や考え方を学ぶ取り組みも紹介された。このような取り組みは、医師の育成に有効だけでなく、大学と地域のつながりを強め、地域医療の体制をつくる基礎にもなるものとして、その意義が高いものと評価された。パネル・ディスカッションでは、さらに、メコン流域諸国での感染症研究と予防への取り組みが紹介され、メコン地域として取り組む意義が大きいことが述べられた。

セッション3では、地域資源について、とくに持続的な観光開発を中心に議論が行われた。日本とタイの観光産業の現状や地域観光についての新しい取り組みが紹介され、観光においては、地域の自然（環境、生物多様性など）・文化が市場取引に上らない資源として利用されており、これらの維持が持続的な観光産業の発展に不可欠であることが指摘された。観光産業に必要な要素を見るとき、文化の保存、生物・環境資源の保全、人材育成、政策提言など大学が専門的知識や技能を総合的に備えているものが多く、大学の果たすべき役割が大きいことが確認された。

総合討論では、各セッションのまとめに続き、課題・分野を通じて大学の地域貢献に重要な知見を整理するための議論が行われた。この中では、いずれの場合にも様々な関係者を結ぶコーディネーターの役割が重要であることが、幾つかの事例から指摘された。例えば大学や企業では考え方・行動の仕方が違うので、違いを学びながら仲を取り持つことができる人材が重要であること。また、関係者間の信頼関係を構築していく上でも、仲立ちをするコーディネーターの役割が重要であるとされた。また、このほかに地域医療や観光開発において、持続的発展という考え方が改めて重要であることが指摘された。

今回の会議を通して、幾つもの成功例を見ることが出来るとともに、大学と地域の産業やコミュニティーとの協力がさらに進むためには、依然として多くの課題があることが明らかになった。今後もそれぞれの知見や課題を共有するための会議を開き、国際的に地域貢献の取り組みを進めることが必要であるとされた。

会議翌日の18日には、参加者は **Research Institute for the Health Science, Chiang Mai University** を訪問し、研究所の主導している地域への取り組み例の紹介を受けた。

会議でも紹介のあった、痴ほう症ケアのほか、地



域の学校において子供の聴力障害を早期に発見するための教育関係者のトレーニングや、タイの伝統マッサージやハーブと近代的な医療を組み合わせた治療などの取り組みが紹介された。1時間足らずの短い訪問であったが、マッサージの体験やハーブティーなどが提供されて、参加者は訪問を楽しんだ。その後は、チェンマイ近郊のランブーン工業団地内にある日系企業（Murata



Electronics (Thailand) Co.Ltd.)を訪ね、工場の見学と合わせて、日系企業から見たタイの大学への期待や協力の可能性について意見交換を行った。訪問した企業では基本的に研究開発はすべて日本国内において行っているとのことだったが、タイの工場においてタイの技術者が中心となり生産ライン・工程の改良や設計を行っているものもあり、専門的な知識を身に付けた技術者はすでにその需要が高くなっている。意見交換の開始時には、企業からはタイの大学との研究協力の可能性についての関心は低い様子であったが、人材育成について協力に大きな接点を見出すことができた。おそらく、先端技術分野での研究協力を直ちに行うことは難しいが、人材育成から協力を始めることで、将来的には研究協力へと発展することが期待される。

■ 第1回 JSPS タイ同窓会準備委員会開催 ■

10月27日（火）、バンコクウェスティンホテルにて、第1回日本学術振興会タイ国同窓会準備委員会が開催された。2005年3月にタイ国論博同窓会（ARAT）が設立されているが、タイ国内のJSPS全事業経験者による研究者ネットワークの形成・強化の拡充に向けた新たな同窓会設立のために、当センターでは2009年4月より1）



JSPS国際事業部作成の名簿：外国人特別研究員、2）タイ国論博同窓会（ARAT）名簿、および3）拠点大学交流事業等、研究者招聘の含まれる事業の拠点大学の連絡先を基にして、JSPS事業経験者へ同窓会の設立の呼びかけと支援の用意があることを伝え、連絡先、職位と同窓会への加入の意思、同窓会幹事の推薦、同窓会幹事等に推薦されたされた場合の受諾の意思の確認の連絡を行ってきた。

この調査に基づき、論文博士取得事業経験者6名、外国人特別研究員、招へい研究者事業の6名の計12名（下記リスト）にタイ国同窓会準備委員会の設立をよびかけたものである。

当日は、タイ国同窓会準備委員会メンバー10名と当センターから池島センター長、角田副セ

ンター長、現地スタッフが出席し、メンバーの自己紹介、同窓会設立に向けた手順やスケジュールの計画、準備委員会の方針、他国の JSPS 同窓会の規則や活動状況、同窓会の名称などについて話し合われた。

第 2 回準備委員会は、11 月 25 日（水）に開催予定となり、現在のタイ国論博同窓会（ARAT）の規則を元に同窓会規則の作成をおこなうこととなった。

Preparatory Committee of The JSPS Fellow Alumni Forum of Thailand

Name	Affiliation	Position	JSPS Program awarded
Dr. Busaba Yongsmith	Dept. of Microbiology, Fac. of Science, Kasetsart University	Professor	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Songsri Kulpreecha	Dept. of Microbiology, Fac. of Science, Chulalongkorn University	Assoc. Prof.	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Jiraporn Chauvalit	Fac. of Oriental Medicine, Rangsit University	Lecturer	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Somkiat Supadech	Fac. of Engineering, King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	Assoc. Prof.	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Suvit Vibulsresth	Geo-Informatics and Space Technology Development Agency	Executive Board	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Sunee Mallikamarl	Institute of Thai Laws, Ramkhamhaeng University	Director	RONPAKU (Dissertation PhD) Program
Dr. Paritud Bhandhubanyong	National Science and Technology Development Agency	Advisor to President	JSPS Invitation Fellowship for Research in Japan (short-term)
Dr. Porphant Ouyyanont	School of Economics, Sukhothai Thammathirat Open University	Assoc. Prof.	JSPS Postdoctoral Fellowship for Foreign Researchers
Dr. Malee Uabharadorn	Office of Transport and Traffic Policy and Planning, Ministry of Transport	Director, Water Transport and Logistics Group	JSPS Postdoctoral Fellowship for Foreign Researchers
Dr. Chalermkiat Songkram	Fac. of Pharmaceutical Sciences, Prince of Songkla University	Assistant Professor	JSPS Postdoctoral Fellowship for Foreign Researchers

Dr. Chinawat Yapwattanaphun	Dept. of Horticulture, Fac. of Agriculture, Kasetsart University	Lecturer	JSPS Postdoctoral Fellowship for Foreign Researchers
Dr. Boonchai Techaumnat	Chulalongkorn University, Fac. of Engineering, Dept. of Electrical Engineering	Assoc. Prof.	JSPS Postdoctoral Fellowship for Foreign Researchers

■ 第2回 JSPS タイ同窓会準備委員会開催 ■

11月25日(水)、バンコクサーミットタワー10階会議室にて、第2回日本学術振興会タイ国同窓会準備委員会が開催され、準備委員会メンバー12人のうち8人が出席した。

第1回JSPSタイ同窓会準備委員会議事録が承認され、JSPSタイ同窓会規則について議論された。同窓会資格、同窓会幹部会の選挙手順、同窓会費等を規則に盛り込み、初年度の同窓会費は徴収しない



こととなった。2010年2月5日の第1回同窓会総会について話し合われ、1) Introduction of Preparatory Committee Member、2) Explanation of Preparatory Process、3) Brief Explanation of Bylaw、4) Explanation of Election Process、5) Election of Executive Committee、6) Closingの内容でおこなわれることとなった。

当準備委員会で作成された同窓会規則案は当センターで連絡先を把握しているJSPS事業経験者に同窓会設立総会の案内と伴に送付され、同窓会加入の最終的な意思確認をおこなうこととなった。第3回準備委員会は、平成22年1月13日の開催予定となった。

■ タマサート大学 (Tammasart University) 訪問 ■

2009年10月5日(月)、タマサート大学を訪問し、JSPSおよび事業を紹介するとともに、今後の日本との協力についての意見交換を行った。

タマサート大学はタイでチュラロンコーン大学と並び古い歴史を持ち、とくに法学、政治学、経済学分野からはタイの学術、経済、政治で要職を務める卒業生を多く輩出し



ている大学である。日本との関係では、工学・農学、医学など科学・技術の交流が目立つ中で、タマサート大学と



京都大学東南アジア研究所を拠点大学とした拠点校交

流を中心とした日・タイの研究者交流はそれぞれの国のアジア研究者の強いつながりに大きく貢献してきたといえるだろう。また、タマサート大学の工学部には、日本から JICA 事業や経団連の支援などを受けて数多くの日本の大学が協力をし、後発の工学部ながら比較的短期間でタイ有数の工学部へと成長した成功例として評価されている。

会合はタマサート大学本部のあるバンコク市内の Tha Prachan キャンパスで行われたが、近年バンコク郊外に作られ多くの学部が移転している Rangshit キャンパスからも職員の参加を得ることができた。会合には国際関係担当副理事をはじめ幾つかの学部、研究所の長、教員 15 名ほどの参加があった。日本との交流は盛んに行われているものの、JSPS 事業の詳細については十分に知られておらず、事業紹介の後は、事業に応募について、いくつもの詳細な質問があった。

また、JSPS の英語名が Science という単語を使っているため、人文・社会科学の研究者からは自分の研究分野では該当する事業は無いのでは、と誤解を受けていることが多いこと改めて感じた。一方、人文・社会科学の研究者では博士の学位を取得しておらずに、研究を続けている教員が比較的多いようで、論博事業にはとくに強い関心が寄せられた。事業説明と今後の交流についての議論は、現在実質的にメイン・キャンパスとなっている Rangshit キャンパスでも開催する必要があるだろう。

■ コンケン大学 (Khon Kaen University) 訪問 ■

2009 年 10 月 19 (月) ~20 日 (火)、コンケン大学を訪問し、JSPS および事業を紹介するとともに、大学の現状についての聞き取りと、今後の日本との協力についての意見交換、さらに JSPS 招へい研究員事業経験者との意見交換を行った。

コンケン大学は 1964 年タイ東北部の中核都市コンケンに設置され、北部のチェンマイ大学、南部のプリンス・オブ・ソンクラ大学と並び、地域中核大学として、タイの教育・研究において高い評価を受けている。現在は教員数 2000 人、学生数 (学部) 24000 人を超え、17 学



部を要する総合大学となっている。会合には農学部、薬学部、医学部、看護学部などから40名を超える方々に出席があり、活発な質疑が行われた。紹介した JSPS の事業については、いずれの事業にも関心・質問があったが、とくに外国人特別研究員、研究者招へい事業についてはこれまで知らなかったという出席者も多く、応募方法などに多く質問があった。



会合の後は Faculty of Associated Medical Science (医療学部) を訪問し、日本との共同研究も含め、比較的活発に研究活動が行われている様子を見ることが出来た。また、コンケン大学は地域中核大学として、地域への貢献が重視されており、多くのセンターや研究所が設置されている。訪問した Faculty of Associated Medical Science においても、運動機能のリハビリテーションのため



の施設が運営されていた。施設はやや老朽化が進んだ様子で、研究や運営の予算はバイオ・医薬研究などの「先端分野」に比べると確保が難しいようであり、タイの研究予算が多くの分野にいきわたるには不足している様子がうかがえた。

会合の前日には、外国人研究者招へい事業(短期)経験者の Prof. Nawarat 歯学部長を訪問した。他にも3人の教員に同席いただいたが、2名は日本(東京医科歯科大学、広島大学)で博士学位を取得している。Prof. Nawarat は6年の勤務につき1年間の権利が得られるというサバティカル・リープの期間を利用して、招へい事業により東京医科歯科大学で研究を行った。滞在期間中には講義、研究と共同研究計画の作成と論文執筆



を行い、とくに共同研究からの論文執筆は5つの学術論文を書き上げることができ、大変に成果の多い滞在となったとのことだった。Prof. Nawarat は博士学位は米国で取得しており、米国との共同研究も活発に続けている一方、日本の大学(東京医科歯科大学、広島大学)とも活発な交流を行っている。JSPS のアジアとの交流プログラムがほとんど日本の研究機関とアジア諸国の研究機関との交流のみに限定されているが、欧米の研究機関をパートナーとして含めることが出来るようなプログラムがあれば、分野によっては大いに活用され、日本の研究者にも海外との研究交流を進める魅力の大きいものとなるであろう。

■ アジア教育研究拠点事業大阪大学・マヒドン大学「若手人材育成セミナー」出席 ■



12月14日(月)にマヒドン大学にてアジア教育研究拠点事業「亜熱帯微生物資源を活用する次世代物造りバイオ技術の構築」の若手人材育成セミナーに出席した。

多くの東南アジアの若手研究者は、日本などの先進国でレベルの高い基礎研究によって学位を取得した優秀な人材であるが、自国帰国後は、各東南アジア諸国における政策が応用面を重視し、基礎研究を軽視する傾向にあるため、基礎研究が疎かになり、応用的な研究に従事しているのが現状である。さらなる東南アジア若手研究者の育成には、このような傾向に満足しない研究者の育成が必要であり、日本やタイの指導的研究者のリードのもと、物造りバイオ産業バイオを中心とテーマとして今回のセミナーが開催された。開会の辞では、池島センター長が挨拶をおこなった。若手研究者が各々従事している研究テーマについての口頭及びポスター発表をおこない、日本とタイの先端的な研究者の具体的事例の方向性やアプローチ法などについての助言がなされた。

■ JSPS-NRCT Joint Seminar 2009“Strengthening the Advancement in Fishery Research: Towards the Sustainable Cooperation”への出席 ■

本セミナーは東京海洋大学(旧東京水産大学)とカセサート大学による10年にわたる拠点大学交流事業：新世紀における水産食資源動物の生産技術および有効利用に関する研究を総括するもの



のとして、2009年14、15日、タイのラヨン県において開催された。バンコク研究連絡センターより池島センター長が出席し、レセプションにおいて挨拶を行った。本セミナーには両大学より、松山優治学長、Vudtechai Kapilakanchana 学長が出席し、基調講演を含め85題の研究発表が行われる盛大なセミナーであった。参加者は協力大学を含め、政府機関研究所、

国際機関など様々な機関に所属しており、拠点大学交流事業によって築かれた人材ネットワークが大きいことを示していた。

会議では拠点大学交流事業を通じて、多くの研究成果が生まれ、派生的に生まれた共同研究も含め日タイの水産学研究者に強いネットワークが作られたことが確認され、今後、この成果、人材ネットワークをASEAN地域の協力へと拡大していくことが提案された。水産学は天然資源の採集から、養殖、バイオ・食品加工技術と多岐に渡り、交流事業は大きく3つの分野に分けられ、

またセミナーも4つのセッションによる分科会形式で発表が行われていた。今後は、異なる分野間の繋がりを最確認・再構築し、生物資源の持続的な利用に役立つ総合的な研究ネットワークとなるような配慮も求められるであろう。

■ 1st NRCT-IFS-IRD Workshop: Research methodology and scientific proposal in natural products, food science and nutrition 出席 ■



International Foundation for Science (IFS)はスウェーデン・ストックホルムに本拠を置き、発展途上国の若手研究者に、生物資源および水資源の持続的な利用に関連する分野の研究費を助成する機関である。若手研究者に焦点を当てており、個々の研究者への助成額は決して大きくないが、IFSの研究助成を得ることは、駆け出しの研究者の「信頼度、信用度」を大いに上げるものと評価されている。このワークショップは、NRCT、マヒドン大学、IRD（フランス途上国開発研究所）との共催で、タイを中心に周辺国のベトナム、ラオス、ミャンマー、さらに、インド、ネパールの若手研究者を招いて、研究の立案から計画、研究費申請書の作成、研究のまとめと論文発表まで、研究のプロセスを体系的に講義しながら、実際に自分の研究計画・研究費申請書を作成するというものであり、9月28日（月）～10月2日（金）までの5日間にわたってバンコクのGrand Tower Inn Hotelで行われた。このうち9月30日（水）に行われた研究助成機関からの代表者によるパネル・ディスカッションに招待を受け、当センターから池島センター長がパネリストとして参加した。パネリストはIFSの他にNRCT、NSTDA（タイ科学技術開発庁）からも出席があり、それぞれの機関の研究助成の概要を紹介し、若手の研究者が活用できる研究助成を知ってもらうと同時に、様々な研究助成を有効に活用して、研究・キャリアを続けていくための情報や、そのためのアドバイスなどが提供された。

パネル・ディスカッション中、池島センター長がJSPSの概要とプログラムを紹介し、特別研究員の他にもアジアにおいて多国間との共同研究を目指したAsian Core、Asia-Africa Platformプログラムにも強い関心が寄せられた。

30日午前中に行われた講義では、研究目的の設定について、また研究論文をまとめる意義とその過程について詳細な解説が行われた。それらの講義の要点はそのまま研究助成の申請書においても要点となることである点も、繰り返し説明され、研究計画の作成に必要なステップを細かく学ぶことができものであった。若手の研究者には有意義なワークショップであるが、それだけ十分に練られた研究計画と研究助成申請が少ないという実情を反映したものでもあるよ

うだった。関係者を知る研究者の話では、この地域から良い研究申請が十分に出てこないという悩みがあり、よい研究申請を得るためにこのようなワークショップから始めなければならぬという事情があるとのことであった。このことは日本や欧米で博士学位を取得して母国へ戻った研究者が、その後活発な研究活動を続けなくなってしまうケースが多いことも関係しており、共同研究プログラムや研究者交流において、帰国した若手研究者の研究環境の向上を支援し、研究への意欲を持続させるような仕組みを組み込んでいくことは意義のあることといえるだろう。

■ チェンマイ大学医学部 50 周年記念事業参加

Celebrations of the 50th Anniversary of the Founding of the Faculty of Medicine of Chiang Mai University ■

チェンマイ大学医学部からの招待をうけ、チェンマイ大学医学部創設 50 周年記念行事に、当センターから池島センター長、角田副センター長が出席した。記念行事のうち 11 月 1 日〔日〕に行われた Dean's Round Table Discussion の、Session IV "How to transfer expertise in Greater Mekong Subregion (GMS)" と題されたセッションへ参加した。Dean's Round Table



Discussion はこのほかに Preparation for borderless medical education in free-trade world (FTA)、Promotion of medical education in Greater Mekong Sub-region (GMS)、Promotion of health education and economy in Greater Mekong Sub-region (GMS) と題されたセッションとあわせて 4 つのセッションが行われ、チェンマイ大学医学部が中心となり今後 GMS 諸国との医学・保健分野での協力を推進するため、GMS 諸国を初め、日本やアメリカを含む各国の研究者の議論から、新しいアイデアや提言を得ようというものであった。

当センターから出席したセッション 4 では、チェンマイ大学をはじめタイのマヒドン大学、コンケン大学、日本からは群馬大学、香川大学、神戸大学、日本医科大学、および中国より研究者が参加して、研究においても医療体制においても、タイよりも遅れをとっている GMS 諸国へ、どのような貢献ができ、またどのようにしたらそれを推進できるかについて議論が行われた。各参加者からはすでに行われている医療分野での人材育成、共同研究などの取り組みが紹介され、今後の協力のための土台はすでに出来つつあることが確認された。一方、学術面では定期的な学術会議や学会のように、情報や知見を GMS 諸国で共有していくための土台作りが必要であることが指摘された。また、日本の大学へは水銀汚染など、公害問題等で経験のあ

る分野でも、GMS 諸国への貢献ができるだろうという意見が述べられた。会議全体の成果についてはチェンマイ大学によりとりまとめが行われる予定である。

■ NRCT50 周年記念式典出席 ■

10月28日(水)タイ国家学術研究会議(以下NRCT)は創立50周年を迎え、10月28日~30日の3日間、タイ国家学術研究会議本部にて記念行事が開催された。10月28日の記念行事開会セレモニーには、「仏教と研究」に関する講義と50周年を記念した仏教的な儀式がおこなわれ、アピシット首相が参加され、タイ国の研究の重要性を多くスピーチをおこなった。29日、30日の両日は、医療、教育、経済・社会等の分野の学術セミナーが開催され、タイ国内の研究者や一般聴講者、関係省庁や機関から200名を越える出席者があった。



■ Unesco Conference on Capacity-Building in Life Sciences 出席 ■

2009年10月9日(金)、バンコク Sian City Hotel にて「UNESCO Conference on Capacity-Building in Life Science (次世代人材養成スキームを立案するユネスコカンファレンス)」が開催された。

ユネスコ微生物学国際大学院研修講座は、アジアにおける大学教員等若手研究者を対象として、工業微生物学に関する研修を行い、アジア諸国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としていた。日本での10ヶ月にわたる研修では、研究指導による微生物学に関する深い知識習得と技術の習得を重要視している。

1973年、大阪大学を中心として、文部省・UNESCOからの資金により、東北大学・東京大学・京都大学・九州大学との共同事業として、微生物学大学院国際研修講座が開設され、2004年10月、対応分野を広げてバイオテクノロジー国際大学院研修講座として新研修講座を開始し2007年までの33期にわたって実施され、約450人の修了生を輩出した。



今回のUNESCOカンファレンスは、同窓生や東南アジア諸国の関係者を集めて、人的ネットワーク形成の貢献及び次世代の人材養成プログラムを企画・立案を目的として開催された。

100人を超える同窓生及び関係者等の参加者を迎え、盛況のうちに終了した。バンコクの他に、ベトナム・ハノイなど、東南アジア4カ国5カ所でコンファレンスを開催するという。

■ 国際交流基金講演会「モノづくりと日本人～江戸時代に培われた文化と科学技術」出席 ■

2009年11月24日（火）泰日工業大学にて、国際交流基金バンコク日本文化センターとの共催のもと、「モノづくりと日本人～江戸時代の培われた文化と科学技術」をテーマにした、国立科学博物館高橋研究部科学技術史グループ長である鈴木一義氏の講演会が開催された。泰日工業大学の学生等が100人を超える参加があった。



日本独自の「用の美」は江戸時代に生まれ、技と美を併せ持つモノづくりを目指し、日本人が磨き上げてきたモノづくりは、職人らが使う側に立つ始点と高い美意識、感性により、単なる機能を超える「用の美」を無意識に人々の日常の中に取り組んでいたという。日本人のモノづくりや科学技術に対する文化を、さまざまな事例を紹介しながらの説明がなされた。

■ 日本留学フェア開催 ■

独立行政法人日本学生支援機構による平成21年度日本留学フェアがチェンマイ（Chiang Mai Orchid Hotel）とバンコク（Imperial Queens Park Hotel）との二つの会場でそれぞれ11月27日（金）、11月28日（土）に開催された。バンコクでは、日本から国立大学18校、私立大学18校、日本語教育関連機関15校、専門学校1校、その他3つの関連機関が参加し、日本への留学を希望する高校・大学生を対象に、資料の展示・配布、個別面談により各校の最新の情報を提供し留学交流の促進に努めた。また、全体オリエンテーションでは、日本留学DVDの上映や日本政府奨学金の説明及び日本留学体験談の発表などがおこなわれた。



■ 第4回大阪大学バンコク公開講演会「感染症から私たちの身を守る」 ■

11月7日（土）Grand Millennium Sukhumvitにおいて、第4回大阪大学公開講座が開

催された。大阪大学バンコク教育研究センター、日タイ感染症共同研究センター（RCC-ERI）の主催、在タイ日本大使館、タイ国日本人会後援、バンコク病院共催により、在タイ日本人に関心の高い感染症についての公開講座が行われた。岡山大学大学院医歯薬総合研究科・森島恒雄教授「新型インフルエンザ 最近の動向から」、国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター・岡慎一センター長「エイズに対する正しい知識」、大阪大学歯学部附属病院長大嶋隆 教授「むし歯と歯周病 -予防から治療まで-」といった幅広い3講演の後、西宗日タイ感染症共同研究センター長の司会のもと、質疑応答がおこなわれた。また、関連企業の展示ブースも開設された。

■ JICA タイ事務所「タイ向け ODA 概要説明会」出席 ■

11月10日（火）国際協力機構（以下 JICA）バンコク事務所にて、タイ向けの ODA 概要説明会が開催された。日本からタイに対する ODA への実施はすでに 50 年を過ぎようとしているが、近年は、「途上国から中進国へ」、「被援助国からパートナーへ」と、その関係性が変容してきている。また、民間主導でもたらされているタイの成長において、ODA がどのような役割を担うべきなのかが、JICA の課題になっているという。ODA のより一層の理解促進と今後の対話強化を目指し、当説明会が開催された。

在タイの政府関係機関等の日本人を対象に、JICA バンコク事務所大西所長より、①これまでの「タイ」及び対タイ ODA の全体像、②対タイ ODA の現状（方針、実施中のプログラム・プロジェクト例）③対タイ ODA の今後の方向性などが説明された。また、在タイ日本大使館より、草の根・人間の安全保障無償資金協力、日本 NGO 連携無償資金協力について説明がなされた。最後に、活発な質疑応答及び意見交換がなされ、在タイの日本関係機関の横の連携や情報交換が対タイ ODA にとって必要であるといった意見がよせられた。

■ 第6回科学技術連絡会 ■

12月18日（金）、在タイ日本国大使館4階大会議室にて、第6回科学技術連絡会が開催された。宇宙航空研究開発機構、国際交流基金、国際協力機構、国際農林水産業研究センター、新エネルギー・産業技術総合開発機構、情報通信研究機構、東京工業大学バンコク拠点からの代表者が出席した。当センターから池島センター長が出席し、当センターの活動について報告をおこない、その後メコン地域における今後の協力の可能性などについてフリーディスカッションがおこなわれた。次回は3月に開催される予定である。

■ タイ・英国間で科学技術条約を締結 ■

タイ国科学技術開発庁（NSTDA）は英国科学政府事務所長のジョーン・ベディントン教授と科学技術に関する条約を締結し、新種の病気、バイオエレクトロニクス、生命科学、気候変動等の分野で研究と開発をすることとなった。

NSTDA のサカリン・プムラタナー長官によれば、タイと英国はこれまで 8 つのワークショップを共同で開催したこともあり、今、公式な協力関係を結ぶのにふさわしい時期であるという。

最新の計画のもと、最初の共同ワークショップが 11 月におこなわれる予定である。両国とも研究費を負担する予定である。

タイ側は、NSTDA の研究機関の他に、タイ国電子・コンピュータ技術センター（NECTEC）、タイ国遺伝子工学バイオテクノロジーセンター（BIOTEC）、タイ国金属・材料技術センター（MTEC）、タイ国ナノテクセンター（NANOTEC）の研究者がこの共同研究に関わることになる。

「我々の役割は研究者の手助けをして、共同研究する環境を整え、研究費を援助することである。2 年毎に、事業評価をおこなう予定である。」とサカリン長官は述べる。

ベディントン教授いわく、タイと英国はバイオマス燃料のようなトピックに関して共同研究をおこない、都市部と農村両方における廃棄物の問題に取り組むことになるであろう。

カラヤー・ソポンパーニット科学技術大臣は、両国の研究者間の知識の交流とともに、

資源の共同利用を促すことになるであろうと言う。例えば、英国の持つ病気の蔓延を観測する技術は、タイへ新しい病気を管理する際の技術として利用することができる。

（The Nation・2009 年 10 月 2 日）

■ 研究開発のギャップ ■

研究開発への投資に関しては、タイはまだ他国に比べて遅れをとっていると、タイ国科学技術開発庁（NSTDA）のサカリン・プムラタナー長官は述べる。

韓国は知識の創造に、国内総生産の 2.25 パーセントを費やしているが、今年のはじめには 5 パーセントまで引き上げている。一方、タイは年間、たった 0.21 パーセント、1.8 億バーツしか費やしていない。

1964 年には、タイ・韓国両国は研究開発に国内総生産の 0.2 パーセントほど費やしていたが、これは約 40 年間の両国の大きなギャップがうみだされたことをあらわしている。

「政府に現在の 1 パーセントから 3 パーセント、予算を増額するよう要求している」と同長官は述べる。

「民間企業はその強化のためにもっと研究開発に投資しなければならない。この問題は、中小企業に、どうやって付加価値のある商品を作るかということの研究させることと関連している。また、これは創造的経済の基盤でもある。」と同長官は述べる

官と民の両方からの支援は必要であると同長官は述べる。政府は、研究の方向性を 5 - 10

年のスパンで計画をすすめるべきである。

「タイは基礎力が悪く、生産性と技術的なインフラの効果も低い。」と長官は述べる。

タイは、コスト削減同様、多様な製品をつくりだすことは慣れており、変化を可能にする重要な知識を有している、と加える。

「しかしながら、過去にわれわれは環境について語ることはほとんどなかった。だから、未来の環境を守る技術が、社会的な格差を狭めることと同様に必要である。」と言う。

気候変動と食料危機が大きな懸念であることを、かわりゆく風景があらわしている。

「われわれが何も変えなければ、地球の温度は 6 度上がるはずだ。2 度以下に押さえるには、あらゆるセクターでのやりかたを変更する必要がある。それは、コストの削減にもつながるはずだ」と述べる。

われわれが何もアクションをとらない国内総生産の 5～20 パーセントが浪費されるのに対して、協力すれば世界の国民総生産の約 1 パーセントが有効に使われることになる。

「生活様式に合うような、技術の採用をしなければならぬ。」と同長官が加える。

(Bangkok Post・2009 年 11 月 23 日)

10月

- 10月1日 1st NRCT-IFS-IRD Workshop 出席 (センター長・副センター長)
- 10月5日 タマサート大学訪問 (事業説明会) (センター長・副センター長・現地職員)
- 10月9日 Unesco Conference on Capacity-Building in Life Sciences 出席
(センター長・副センター長)
- 10月16日 JICA 打合せ (センター長)
- 10月19日～20日 コンケーン大学出張 (センター長・副センター長・現地職員)
- 10月27日 第1回 JSPS タイ同窓会準備委員会開催
(センター長・副センター長・現地職員)
- 10月28日 NRCT50周年記念式典出席 (センター長)
- 10月31日～11月2日 チェンマイ大学医学部50周年記念講演会
(センター長・副センター長)

11月

- 11月4日 お茶の水女子大学 足立教授、申准教授来訪
東京医科歯科大学 小関国際課長来訪
- 11月5日 アジア経済研究所バンコクリサーチセンター 横山副所長来訪
- 11月10日 JICA タイ事務所「タイ向け ODA 概要説明会」出席
(センター長・副センター長)
お茶の水女子大学 高橋講師、田淵七海子氏来訪・打合せ
- 11月15～19日 2nd JSPS International Forum: Roles of Universities in
Community/Regional Development 開催
(センター長・副センター長・現地職員)
- 11月26日 第2回 JSPS タイ同窓会準備委員会開催
(センター長・副センター長・現地職員)
- 11月30日 大学評価・学位授与機構川口理事・栗原企画・国際課国際係長・井福係員来訪
文科省高等教育局留学生交流室竹花係長・在タイ日本大使館富田書記官来訪

12月

- 12月14日 Asian CORE プログラム大阪大学・マヒドン大学「若手人材育成セミナー」出
席 (センター長・副センター長)
- 12月14日～15日 JSPS-NRCT Joint Seminar 2009 “ Strengthening the

Advancement in Fishery Research: Towards” 出席（センター長）

12月15日 天皇陛下御誕生日祝賀レセプション出席（センター長・副センター長）

12月16日 大阪市立大学中川教授来訪

12月18日～20日 第1回バングラディッシュ同窓会出張（副センター長）

12月21日 健康診断（センター長、副センター長）

12月22日 京都大学東南アジア研究所 藤田教授、清水教授来訪/東京農工大学 河井客員教授来訪（センター長、副センター長）

日本学術振興会バンコク研究連絡センター / JSPS Bangkok Office

113 TWY Office Center、10th Fl. Serm-mit Tower

159 Sukumvit Soi 21、Bangkok 10110

Tel: +66-2-661-6453 Fax: +66-2-661-6454